
現代BASARA

yuna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代BASARA

【Nコード】

N1689M

【作者名】

yuna

【あらすじ】

20XX年、今までと変わらない現代の中で日常が続いていく。それが崩れてほしいという希望をもちながらも、誰もが普通に暮らしていく。

そんな中、島川なおという少し変わった女子高生は教室に忘れ物を取りに行った。その教室に入った際、遭遇したのは異なる戦国乱世から迷い込んだ一人の男。

この瞬間、なおは男 伊達政宗が切欠となり、戦国と現代の二つの世界が入り混じる現代戦国模様を駆け抜けていくことになる。逆

トリップによる現代BASARAここに始まる。

序章「ファーストコンタクト」（前書き）

この小説は戦国BASARA2と戦国BASARA2英雄外伝のキャラクターを使い、現実世界で好き勝手にやらせようと考えたものでございます。

色々オリジナル設定が多量出没するでしょうが、その辺も受け止めてくださったら幸いです。

序章「ファーストコンタクト」

島川なおという人種は変人と呼ばれる部類の女子高生である。見た目だけならば漆黒の癖の無いストレートの長髪、凜々しい美しさを持つ顔つき、一見スレンダーのようで実は出ているところがキチンと出ている体系、などと外見さえすれば美人な女子高生と断言しても過言では無いだろう。ただし彼女の内面は他人と比べると破天荒且つマイペースであり、色々な意味でいろんなものをぶち壊してくれる性格の持ち主なのだ。だから彼女は雑把に分類されると変人にされるのである。

といつても一応一般常識は持っている方ではある。だから極稀に暴走してしまう親友、価値観が大いにズレているライバルに対するツツコミも一応している。それ以外の人種に対しては完全にボケであるが。

さてさて、そんな彼女はというと今日非常に奇妙なものを目にした。

偶々己の教室に忘れ物をした彼女はボロい自転車を漕いで夕方頃に高校にたどり着き、グラウンドで部活中のクラスメイトに声をかけてから教室がある南校舎に入り込み、二階まで上って目的地に辿り付いた。運の良い事に鍵は開いていた。先生が閉め忘れたかどうかは知らない。

ただなおは目の前にいる先客が開けたのだと思った。何故なら教室の中には三日月を模した飾りを額につけた黒い兜と青い陣羽織を身につけ、腰には六本の刀を刺した男が立っていたのだから。

普通ならば大いに驚くべき光景なのだろうが、なおは平然とした様子で男に話しかけた。

「おい、演劇部。なりきるの大いに結構だが、こんなとこまで仮

装なんてしないでいいだろ」

どうやら演劇部のコスプレだと考えたようだ。ちなみに彼女はクラスメイトがどんな部活動をやっているかなんて、全くもって把握はできていない。だからただそれが一番ありえるかなーと思って尋ねただけだ。

なおに呼びかけられた男は動揺する素振りも見せず、振り返る。刀の鍔を思わせる漆黒の眼帯が右目にあり、凶悪を宿した美という表現が似合う整った顔立ちを持った男だ。年は十七のなおより一つか二つ上と言ったところか。

男はなおを睨むように見つめた後、口を開く。

「……Who are you？」

「My name is Nao Shimakawa. で、何故英語で尋ねる。日本人なら日本語で会話しろ」

戦国武将としか言いようが無い外見に英語は不似合いだろう、と思いつつもなおは同じく英語で答える。ただしこの程度ならば小学生でも使える為、大したものではないが。

しかし男はそう思わなかったようで、左目を見開かせて少し上ずった声で尋ねた。

「お前、異国語がわかるのか？」

「簡単すぎるものしか分からん。こちとら赤と黒の間を彷徨うほどの馬鹿なんだから。おかげで不名誉な事に我がクラスでは成績ドベである」

「……自分に向かって馬鹿っていう女、初めて見たぜ」

「私は伊達政宗のコスプレをしてる男なんて始めて見たがな」

えっ ほんと胸を張って言い張るなおに男が呆れるものの、直後に

返ってきた言葉の内容に目を見開いた。

返事が帰ってこないことに不思議を感じ、なおは伊達政宗を連想させる格好をした男に声をかける。

「ん？ どうした、ミスター伊達男」

「悪い。こすぶれの意味を教えてくんねえか」

「は？ 仮装の事だぞ？」

「ハア！？ J o k e にしても性質が悪すぎる！！」

大体合ってる答えを出してみたところ、男はふざけんと言わんばかりの声を上げた。

この様子から見ても、男は短気なようである。ついつい見当違いな事を考えてしまうものの、なおはさすがに違和感を感じ始めていた。男の立ち振る舞い、コスプレの意味を知らない且つ悪い冗談と吐き捨てた事。演劇部のなりきりにしては何かがおかしい。

男側もなおの言動から何か察したのか、怒りを抑えて一つ問う。

「……お前確かさつき伊達政宗って言ったな。何で知っている？」

「名前と見た目ぐらいはさすがに知ってるさ。伊達男の起源にもなったし、戦国武将の中では比較的有名の方だと思うぞ？ 最も名前と見た目と納豆作った人程度のレベルだが。ちなみにバカの私が知ってる戦国武将は基本三人を除くと伊達政宗と武田信玄ぐらいだ。

最も両者共に名前しか知らん」

「そうか」

なおの大雑把過ぎる説明を聞いて、逆に納得がいったのか男は落ち着いた様子で一言返すと近くにあった机の上に座り込んで小さく小さくため息をついた。

行儀が悪い事をしているな、と思いながらもなおは男のただならぬ様子に見てられず声をかける。

「ミスター伊達男よ。どうもお前は演劇部ではなさそうだな。……何者だ？」

「さっきお前が名前に出しただろ？」

「……今、物凄く嫌な予感がしたのは私の気のせいかな」

男の返答を聞き、なおは珍しい事に冷や汗を流した。普段人を振り回す立場にいる為、クラスメイトがこれを見たら少なからず騒ぐだろう光景であろう。

しかし初対面の男はそんな事知る由も無く、なおと真剣に顔を向き合わせて己の名を口にした。

「俺は奥州筆頭“伊達政宗”だ」

伊達政宗。

先ほど話題に出てきた人物の名前、もとい目の前の男の名前。なおはこの事実を聞き、嫌な予感が的中したと思うと共にどうしてそう思ったとも思った。

自分は色々と非常識だと言われてはいるものの、一般常識を捨てたわけではない。だからはい、そうですかと受け止めるほどの樂觀的思考は持っていない。吹っ切れたらそうでもないのだが。

とにかく今、この場で二人きりである為、なおは政宗の言葉が本当かどうか調べる事にした。

「……それは、真か？」

「残念ながら事実だ。俺はこんな見たことも無い鉄で作られた城なんて見たことが無いし、あのでかい庭で連中が何をやってるのか検討もつかねえ。拳句の果てにお前との会話が噛み合わねえ。もうここまで来るとmysteriousすぎてfantasyの領域だ」

なおが半信半疑なのを見抜いているのか、政宗は窓ガラスから見えるグラウンドで練習している野球部に視線を向けたりしながら答えた。もちろんふざけている様子は一切無い。

野球さえも知らない政宗を見て、なおは冗談と思わなかった。ただ彼は真実を告げているんだと直感で理解した。元々本能で行動するタイプである為、面倒な事を考えるのが嫌になったのもあるが。ただそれでも上手く飲み込めないのか、頭がグルグルして仕方が無い。こんな事をしても答えを導き出せる筈が無いのは理解しているのだが、どうも色々なものが追いついてくれない。

だからなおは顔を上げた際、掌を上にした形で両手を前に出して政宗に頼み込んだ。

「すまんが伊達男、腰につけてあるものを持たせてはくれないか」

「Ah? どうしてだ」

「どうも私はお前を信用しきれないようだな。だから過去から来たという証明になるだろう刀の重みを感じて、信用したい」

なおの表情は真剣そのもの。目を決して反らす事無く、キツパリと告げたその意志に好奇心というものも疑惑も存在しない。ただ信じたいという思いがヒシヒシと伝わってくる。

思わぬ願いに対し、本来ならば跳ね除けるのだが現状となおの歪み無い意志に政宗は六本ある刀の内、一本を鞘ごと取り出すと彼女の両手の上にかざす。

「落とすなよ?」

「努力する」

そして政宗はなおの両手に刀の一つを置いた。瞬間、なおの両腕にズシリとした重みが伝わってきた。

生活の都合上、色々と重いものをもった経験はある。だがこの重

みは初めてだった。重量的に持てないわけではないものの、初めて刀という武器に触れ合った為か様々なものが伝わってくる気がする。

これが人殺しのものであり、かつての侍としての証。日本が生み出した魂の一つ。

目を閉じ、その重みをしみじみと感じながらなおは静かに悟る。今、目の前で起きている事は真実であると。

ゆっくりと目を開かせ、なおは軽く笑みを浮かべながら政宗に礼を言う。

「ありがとう、伊達男。お前は過去から来たのをやっと思える事が出来た」

「Thank you、Na o」

政宗もまた礼を言うと、彼女の持つ刀を手にとってゆっくりと離すと己の腰に戻していった。何処か彼の顔がホッとしているように見えるのは理解者が得られたから、緊張も緩んだのだろう。

なおは政宗の隣の机の上に座り、彼に顔を向けて更なる本題へと矛先を向けた。

「さて、これも何かの縁だ。良ければ話してくれないか？ 何故、ここににいるのかを」

政宗は静かに頷き、なおに語り始める。何故己がこの見知らぬ場所にいるのかを。

さあさあ、これより摩訶不思議な戦国乱世と灰色の現代が交じり合う奇妙奇天烈な現代怪奇談が始まりましょう。

第一章・1「認識を改めよう」

政宗の話自体は比較的早く終わった。多少分かりづらい部分もあったものの、なおに考慮してくれたのか大筋は把握しやすいような説明だったのが幸いであった。

なおは腕を組み、少し頭を抱えながらも政宗の話を己流に纏めてみる。

「武田信玄と上杉謙信による川中島の合戦に乱入しようとした際、真田幸村と交戦。その最中、激しい雷が起きた際に気を失い、目が覚めたらここにいた。簡単に纏めるとこんなところか？」

「そうだ。あの時確かに晴れていたのに、どういうわけか俺と真田幸村に向かって落ちてきやがった。あんな雷、俺は出した覚えが無いし小十郎がやった筈もねえ」

「……とにかくその雷によってぶっ飛ばされたって事でいいんだな？」

「ああ」

話の後半、物凄く突っ込みたい衝動に走らされたがなおはあえてスルーする事にした。話が何時まで経っても進まないと判断したのと、空耳であってほしいという願望からである。

それを退けて考えてみるものの、さっぱり分らないのでなおは素直に口にする。

「ふむ、さっぱり分からん。寧ろ謎ばっか増えたな」

「だらうな」

「おや、文句は言わんのか」

「言ってどうにかなるもんじゃねえだろ」

「確かにな」

こんな状況だというのに落ち着いている政宗。己と会話しているから気持ち的に落ち着いているのか、それとも現状を理解しているからこその落ち着きなのか。

とりあえずもつと調べる為にも、一旦政宗を家に連れて帰るべきかとなおは勝手に心の中で決める。ただそれとは異なり、新たな違和感も覚えていた。なおは歴史に関してあまり興味が無いのだが、武田信玄と伊達政宗は異なる世代にいた覚えがかすかにあった。自称ライバルから無理矢理聞かされた話を信じれば、武田信玄は伊達政宗が幼少時に亡くなっている筈だ。この事を疑問に思ったなおは携帯電話を取り出し、親友にメールを送ることにした。

政宗は唐突なおの行動と見知らぬ物体の出現に目を丸くし、つい尋ねてしまう。

「……何やってんだ？」

「ケータイでメールを送ってる。お前の話を聞いてた時、少しばかり違和感を感じてな。歴史に詳しい親友に尋ねようと思ってな」

「Mail? 何でそんなちっこいからくりで出来るんだ？」

「ハッハッハ、馬鹿に答えられると思うな!!」

政宗の質問を満足させる答えが見つからなかったなおはガッハッハッハという擬音がつきそうな程豪快且つ男前に笑いながら言い切った。彼女は胸を張っているものの、それは誰がどう見ても立派なものではない。

（こいつ、何から何まで大雑把過ぎるだろ）

会ってほんの少ししか経っていないのだが、政宗はなおの言動から彼女が細かい事を考えなさ過ぎる人種なのが良く分かった。

伊達政宗は奥州筆頭、つまり奥州を纏める伊達の総大将である。

しかし彼の率いる軍は気性が荒く、現代なりの言い方をすると暴走族そのもの。だがそんな連中を率いてきたからこそ、若くして長になったからこそ、他人がどういいう存在なのかを見破る才は他者よりは優れている自信がある。

しかし隣に座る奇怪な着物 橙色の上着に首元には赤の紐、下に履いている同色のもの（確か異国ではskirtと呼ばれている代物ではなかっただろうか？）は戦で無いというのに丈が短く、すらりとした白い足が丸見えである（ちなみにこれはブレザー服と呼ばれるものであるが、戦国に生きた政宗が知る由も無い） を身に付けた島川なおと名乗った女子は何も隠さない。隠さなすぎる。

ここから見下ろせる庭の光景から見知らぬ世界に来てしまったというのかどうか受け止めたものの、その矢先に遭遇したなおは戦国乱世でも中々類を見ない大雑把さを持っていたから呆氣に取られた。少なくとも政宗のいた時代、大名と呼ばれる男に向かって女がこうも偉そうにする事なんて滅多に無いからだ。例えどこぞの夫妻みたいに尻に敷いていようが基本女は男を引き立てるもの、である。彼女の持つ桜色の不可思議な折りたたみの箱“けーたい”なんて代物も始めて見る。説明を願ってみても、本人はキツパリと嫌がつてみせた。アソコまで行くと寧ろ清々しい。

何もかもがああ戦国乱世と違う。どこか穏やかさと呑気さを兼ね揃えた平成の世界だと、思う。

（本当に……Fantasyだ）

つくづく異世界（未来）を思い知らされ、なおに気づかれないほどの小さなため息をついた。

その時、グラウンドの方面から大きな衝撃音と共に、校舎が揺れた。教室の机も連動して揺れたものの、倒れたものはない。あるとすれば思わず体重を前にかけてしまったなおの座っていた机である。

もちろんなおもこけた。それどころか前にある机の角におでこをぶつけた拳句、背中に座っていた机が激突して二次災害を食らってしまっている。

あまりに間抜けな彼女の姿を見て、こける事を回避できてた政宗は心底呆れきった顔で言った。

「お前、馬鹿だろ」

「うるさい、普段はもっとスマートに回避してるんだ。とりあえずミスター伊達男よ、私を助けてくれ。腰が痛いんだ」

「smartの意味絶対分かってねえだろ」

減らず口だけは絶好調ななおに軽くツツコミを入れ、政宗は床に足をつけてから、彼女の背中にのしかかっている机を元に戻す。なおは腰を抑えて立ち上がると軽く礼を言い、窓からグラウンドを眺める。そして間抜けにも大口開けた面をさらした。

「何だアレは」

「Ah? どうした、島川なお」

「フルネームで呼ばんでいい。それよりアレ見ろ、ミスター伊達男」

彼女に言われるがまま、窓の外に目を向ける政宗。次の瞬間、窓に駆け寄ってガラス越しに外の光景を凝視した。

外　グラウンドの中央、そこには荒々しく猛々しい仁王の上半身とからくり仕掛けの台車という下半身が合体したからくり『仁王車』があった。唐突に空から降ってきたのか、仁王車の真下の地面が若干決れている。

予想もしなかった代物の唐突な出現に政宗は驚愕し、思わずその名を呟く。

「仁王車……!!」

「え、知ってるのか？」

「知ってるも何も長曾我部や松永が使ってるからくり兵器だ！ 何でこんなところに……！！」

何故ある、戦国時代。

真剣そのものといった政宗の返答に、なおは思わず心の中でツツコミをぶち込んだ。

とにかくそんな事はどうでもいい。問題なのは、あの仁王軍がここに唐突に現れた事の方だ。幸い休憩時間だったのか、グラウンドで部活をしていた野球部員はベンチに集まっていた為、誰も怪我をしていないようだ。腰を抜かしている連中は沢山いるが。

まだ被害が無くてよかったとなおは一安心する中、政宗に駆け寄って声をかける。

「伊達男、あの仁王軍は……」

「川中島には無かった。俺の知ってる限りじゃ、アレは長曾我部、松永、豊臣、本願寺軍しかもってねえ」

「色々と言出ししたいが、気合で飲み込んでおこう。それであの仁王軍とやらはどうやってたら動き出すのだ？」

「近づいただけで勝手に動き出す。結構痛えぞ、あの張り手」

「経験済み！？」

政宗の言葉を聞き、なおは思わず声を上げた。遠目から見ても仁王像と解る代物相手の攻撃を食らい、無事だった事に驚きを隠せず にいた。普通は死んでてもおかしくないと思うのだが。

いや、さっきからどうも可笑しな点ばかり見えてしまう話をして いる。政宗がこんな状況下でボケをするような男とは思えないし、目の前の光景が非日常でも現実であるというのは受け止めている。 それでも、非現実的すぎて中々頭が追いつかない。ただ心は辛うじて追いつけている為、平常心でいられるのが救いか。

ふと政宗となおは再度仁王車のある外を見る。次の瞬間、二人して窓に張り付いた。（政宗の方は兜が窓ガラスにぶつかり、余計なダメージを負った）

グラウンドでは無謀な事にシヨックから回復した野球部員数名が、仁王車に駆け寄っていたのだ。ものめずらしさからか、好奇心からかは分らない。ただ、なおは間違いなく後者だと判断していた。何せこの学校には色々と非常識なお方が約一名いらつしやるのだから、それで皆あいつの仕業だと連想してしまった可能性が高い。

そうこうしている内に野球部員の一人が射程内に入ってしまったのか、仁王車が震動したのがなおの目に映った。

やばい！

直感的になおが察した直後、政宗が彼女の制服をつかんで無理矢理己の後方に突き飛ばす。そのまま刀を一本抜き、両手で持つて構えると叫ぶ。

「HELL DRAGON!!」

直後、政宗の刀の先端から大きな雷の球体が出現し、凄まじい勢いで発射された。雷は窓を突き破り、遠いグラウンド目掛けて飛んでいき、凄まじい遠距離だというのに、仁王車の胴体へと直撃した。攻撃を食らった仁王車は震動がとまり、停止する。雷が器用なのか、彼等の運が良かったのか、野球部員は誰一人として怪我をしていなかった。

いきなりの事態に追いつけず、瞬きする事しかできないなおを他所に、政宗は口笛を吹く。

「 Inferior goods だったみてえだな。こりゃ lucky……ってどうした、なお？」

「……イマノハナンド、ミスターダテオトコ」

「婆娑羅だ」

「BASARAって言われても分かるかーっ!!」

平然と一言で答えた政宗に対し、なおは思わず大声で怒鳴りつけた。いきなり的大声に政宗は一瞬怯むものの、宿敵の紅い男のおかげでこの程度ならばどうって事は無かった。

一方でぜえぜえと肩で息をするなおは内心確信していることがあった。

政宗の言動、意味の分からない用語、結び付けられない用語、奇怪な雷の力、これらは全て過去は愚か現代日本ではまずありえない事であると。なのに政宗は当然と言わんばかりの態度で、どんどん出してきた。それに何よりも、グラウンドにある仁王車とぶつ壊れた窓ガラス。これらが物的証拠として、非現実的事象を現実だと訴える。

軽く深呼吸して己を落ち着かせると、なおは政宗と向き合つと単刀直入に告げる。

「どうやら私はとんだ思い違いをしていたようだ。伊達男、お前は過去の人間ではなく異世界人のようだ」

キツパリと告げた彼女の言葉に、政宗は怯むどころかニヒルな笑みを浮かべた。

「OK。どっちにしろ、変わらねえ」

「……ああ、お前からすればそうだったな。とりあえずここでは場所が悪い、もう少し落ち着ける場所で話をしよう」

なおがそう言いながら元窓、現焼け焦げた穴から外を見ると、動かなくなつた仁王車に集まるギャラーだけではなく、こちらを指差して騒いでいる者達が大勢いるのも確認できる。

一方で政宗も耳を済ましてみると、複数の足音がこちらに近づい

てきているのが聞こえた。どうも派手にやってしまったらしいな、と軽く舌打ちする。

その間、なおはケータイを取り出すと耳に当てながら政宗に告げる。

「安心しろ。少々賭けではあるが、どうにかする手段は有る」

「What?」

「とりあえずこれからの展開に、口裏を合わせてくれ。ここからは脳みそフル回転だからな」

「……OK」

政宗が答えたのを見て、なおが満足そうに頷く。同時にケータイが繋がった。

この後、伊達政宗は色々と言葉にならないものを見る羽目になるのはまだ知る由も無かった。

第一章・2「何事も一度で終わらない」(前書き)

どうも、遅れました。

なお「何故遅れたのだ？」

……戦国BASARA3にずっとはまっていました。

なお「……で、そいつ等も出すのか？」

それは禁則事項です

なお「そうか。とりあえず読者の皆様、お待たせしてすまない。こんな作者が見捨てないでくれると助かるよ」

第一章・2「何事も一度で終わらない」

ケータイで連絡が終わった直後、すぐさま教師達がすっ飛んできて、なおと政宗に何があったんだと詰め寄ってきた。しかもバツチリ破壊された窓も目撃されていた為、上手い言い訳が見つからなかった。

ただなおが「責任者がもうすぐやってくる」という出任せを口に出している事に、政宗はどうする気だとひやひやしていたら、その人はやってきた。

「申し訳ございませんわ。私のミスでこのような事になってしまいました」

ドアを開け、丁寧な口調で謝罪しながら入ってくるのは一人の女であつた。

制服を身に付けていても分かるほどの大きくふくよかで目を奪われる胸、細いくびれによってスタイルを強調させる腰、スラリと伸びた白く細く何かを踏むのには十分すぎる脚、と体系は素晴らしいもの。また首から上も美貌といえ、美貌であつた。女王の貴祿を見せ付ける表情ではあるものの丸い黒真珠のような瞳、軽く赤が乗せられた柔らかな唇、太陽の明るさを思わせる茶色の髪、などから連想させるのは幼い姫君のもの。

「なっ……」

しかし政宗は美貌の姫君に驚愕した。彼女の容姿は確かに素晴らしい、素晴らしいのだが政宗からすればそれ以前に目を奪われる部分があつた。彼女の顔は、己の知人、それも宿敵に瓜二つなのだ。

髪型の方も長い長髪をリボンで一つにくくり、俗に言うしつぽ風にしている為、益々そっくりなのである。

あいつ、Womanになったらこういう外見してんのか……。

こんな状況下だというのに、似すぎた外見ゆえに思わずあの暑苦しい宿敵と並べ立ててしまう。性格はともかく、顔は完全に類似している。こうそっくりだと今川軍のアレに騙された連中に見せてやりたくなる。

政宗がどうでもいい思考に落ちかける中、なおはやってきた彼女に対して助かったと言わんばかりの声を上げた。

「遅いぞ、プリンセス！」

「グラウンドに落ちた代物の回収の指示も行っていたのですから、仕方ないでしょう？ 全くあんな事態になるだなんて、私としても想定外でしたわ」

深いため息をつき、流し目でグラウンドの方を見る彼女。その態度に唖然としていた教師の内、一人が我に返って彼女に怒鳴る。

「さ……真田！ またお前かあ！？」

「What!？」

予想外の名前の出現に政宗は反射的に声を上げてしまった。それを聞いたなおが彼を睨みつけ、目線で「何やってるんだ」と怒る。彼女の意図に気づいたのか、政宗は眉間に皺を寄せる。

しかし当の真田と呼ばれた彼女は得意げな笑みを浮かべ、こう言った。

「我が財閥では、最近秘密で色々な取り組みを行っていました、これもその一環です。ただ命令を聞かない馬鹿もいました為、極秘であるプロジェクトの一部が露見してしまい、尚且つ皆様に迷惑を

かけた事には謝罪しますわ。ですが、この事に関してはどうか内密にお願いしますわ」

うわ、こいつ謝罪してる気全然無え！　口は謝罪の言葉を一応述べてはいるものの、態度は尊大で女王様そのものと言ったものだ。目の前の教師が何か言いたげにしながら、表情を面白おかしく滑稽に変えている。無論本人は言葉が出ないだけなんだろうが。

だけど真田は笑みを保ったまま、相手の話も聞かずに己のペースで続けていく。

「ああ、そちらの彼は島川さんをお願いしてここまで連れてきた私の部下ですわ。どうもあれが誤作動を起こしかけていた為、ここで止めてもらったんですの。うちの新製品を使つてね」

「だ、だからって壁を壊していい理由にはならないわよ！」

「お嬢様だからって、常識が無さ過ぎるだろ！！」

彼女が言い終わった隙を狙い、声を荒げる教師陣。その内容を聞き、なおと政宗は内心「そりやそうだ」と納得していた。打ち合わせもしていないのに嘘八百を言う雪子であるが、その内容はフオロ―しづらいものである。……現実を知ってる二人からすれば、大体あつていなくもない嘘であるが。

現実論を展開させる教師に対し、雪子はカツと目を開くとそれよりも強い勢いで怒鳴りつけた。

「お黙りなさい！！　この程度の損傷、我が財閥で綺麗サツパリ直せますわ！　あなた方はあれが暴走しなかった為、皆に被害が及ばなかった事の方に喜ぶ事を最優先させなさい！！　非現実的事態が起きたからといって、一介の生徒にイライラをぶつけるのは良くありません事よ！！　修理費全てこちらで提供致します故、あなた方は何も心配しなくていいですわ。それとも天下の真田財閥相手に、

やりあえる度胸があると言いますの？」

そのまま激しい滝の如く言葉で叩き伏せ、トドメとして冷酷な声で尋ねてみる。それを真正面から受け取った教師陣は背筋に凄まじい悪寒が走り、言葉を失う。その様は正しく鶴の一声と呼ぶに相応しい。

この光景を眺めていたなおはニヤニヤ笑いながら、小声で呟く。

「さすがはプリンス・雪子。こういう時には一番頼りになる女だ」
「……何なんだ、あいつは？」

「真田雪子。この世界で一番でっけー大金持ちの娘で、次期跡取り。性格は見ての通り、凄まじいが頼りになる奴だ。無茶苦茶な事が起きて、言い訳に使える」

「なるほど。口裏合わせろっていうのは、そういう理由か」

目の前で明らかに年上の教師陣を圧倒し、威風堂々としている真田雪子を横目で見ながら政宗は納得する。あれだけ豪気で自信満々に嘘を貫き通す姿は、アツパレとしか言いようがない。

その後、雪子に圧倒された教師陣が撤退していき、教室には三人だけが残った。完全に大人達の気配が無くなったのを悟ってから、雪子は二人に体を向け、深い深いため息をついて嫌味を吐いた。

「私に尻拭いさせた罪、どう取ってくださいますのかしら？」

「初っ端からきついな、スノープリンス。しかし良く話を聞いてくれたな」

「島川さんが私にヘルプを送ったという事が異常でしたので、来てみれば……こんな事態ですし」

破壊された壁を横目でチラリと見る雪子。先ほどは勢いで納得させたものの、窓の面影が無くなるほどの破壊力（しかもグラウンド

に落ちた仁王像も一緒に）なんてさすがにありえない。
そう言いたげな雪子の顔を見たなおは政宗を指差し、簡潔に言った。

「このなんちゃって戦国武将による異世界パワ―による現象だ」
「島川さん、ついに頭がお花畑を通り越して水底に逝ってしまいましたのね」

「その説明の仕方は無いだろ、テメエ」

雪子の哀れみに満ちた皮肉と政宗の心底不愉快そうな反論によって、なおの間違っではないが馬鹿らしい説明は切り伏せられた。

この後、政宗が雪子に詳しい説明を入れた。彼女自身は半信半疑であったものの、なおの補足と現状、及びに政宗の存在からそれら全てを受け入れた。それどころか今回の言い訳について相手がツツコミを入れてこないようにする為、政宗をこちらで保護すると雪子自らが申し出た。

最初なおは「いきなり金持ちの家体験大丈夫なのか」と焦ったものの、当の本人は気にしてないどころか面白がっている様子であったため雪子に任せる事にした。

……政宗があのとんでもなく広い洋風お屋敷に困惑されない事を祈りながら。

そういうわけでおは自転車に乗り、帰宅していた。道中忘れ物とってない事に気づいたものの、最早面倒になったし、今回の騒動でうやむやになるだろうと楽観する。

とりあえずコンビニで寄ろうかなと考えながら歩道を自転車で進

んでいると、思わぬものが目に入ってきて自転車を止めてしまう。

「……おいおい、まさかの同類かよ」

何の、とは言うまでもなく学校で騒動を起こした伊達政宗と仁王像の、である。

そう断言した理由は簡単。人間の胴体は軽々と超えた長さを持つ超刀を持ち、肩に猿を乗せた男が通りかかる人に話しかけているという光景を目にしたからだ。しかもその男、目立つ黄色の着物で体格も大きく、とても長いポニーテールと羽飾りという特徴的にも程が有る慶喜者の格好をしているから、余計に確信がもてた。（ちなみに話しかけられた人はドン引きしながら軽く断った後、速攻で逃げ出した）

政宗はまだ見かけがマシだったんだな、と思いながら雪子に報告メールをしようとケータイを取り出そうとした際、男の方がなおに気づいて駆け寄ってきた。

「ん？」

「あ、あのちよつと色々聞きたいんだけど、いいかな……？」

大きな体格の割には、声は弱弱しく遠慮がちだ。目も彷徨いがちであり、不安に満ちているのが良く分かる。

この様子からなおは失敗続きだったんだと察し、ケータイを一度しまつと自転車から降りて返答する。

「私に答えられる範囲なら構わないが、先に聞きたい事がある」

「え？ えと、何を……？」

「六本の刀を持つ侍の知り合いか？」

なおの質問を聞いた男は少し呆気にとられるものの、すぐに何度

も頷いた。

「知ってる！ 知ってる知ってる！！ それ、奥州の独眼竜だろ？
！ あんた、独眼竜の知り合いなのかい！？」

「独眼竜が三日月頭のミスター伊達男の事を言っているのならば、
答えははいだ。もっとも友人に押し付けて、別れてきたばっかだ
な」

「で、どこ！？」

「知らん」

仲間がいる事に大層嬉しかったらしく、男はテンションが一気に
上がったものの、なおの一言に一気にテンションが下がった。肩も
落として、深いため息まで出てしまい、拳句の果てには肩に乗って
る猿が彼のほっぺを撫でて元氣付けるといふ始末。

分かりやすい男になおは動じる事無く、話を続ける。

「だから私についてこい。ここで立ち話するのも面倒だし、歩きな
がら説明する方が良いだろ」

「え？ え、えーと……つまり？」

唐突な誘いに男は戸惑い、なおに先の言葉を問う。なおは単刀直
入に答えた。

「私の家に来いと言ったんだ。お前の姿は目立つから、せめて家に
持ち帰ってペットにでもした方がまだ言い訳が聞く」

「……良いのかい？」

「オーケーに決まってるだろ、ミスターポニーテール。私はそんじ
よそこの人に比べると、かなりのお人好しだ」

傍から聞いてると若干ふざけた言い方ではあるものの、至って真

面目に言い切った彼女の言葉に、男の顔は再び明るくなって凄く嬉しそうな声で礼を言いながら彼女の両手をつかんでぶんぶん振った。なおは腕がちぎれると悲鳴を上げた。

男は前田慶次と名乗り、先ほどまでの不安と困惑を吹き飛ばす勢いでなおにこの世界に飛んできた経緯を話してくれた。何でも利とまつねえちゃんをどうにか振り切り、四国の友人のところからくり見物を楽しんでいたとのこと。ただしからくりの整備に異常があったらしく、そこで爆発が起きてしまい、気がついたらここにいた、という事態になったらしい。

なんともベタな設定だとなおは思ったものの、既に前例が一名いるので突っ込むのはやめておいた。それよりも、他にこっちの世界に來ている武將達の方が気になって仕方が無かった。

慶次の話を聞く限り、彼はなおに会うまで孤独に近かった。価値観の違いと彼自身の奇怪さ・知らなさから、相手にされず、色んな人に逃げられ続けてきて、それでも聞かないと何も分からないから根気強く話しかけていたらしい。途中青い格好の人に注意されそうになり、大慌てでこっちに逃げ出したとも付け加えた事から、警察に捕まりかけたのも分かった。

それは大層不安な事だっただろう。少し話せば分かる事だが、慶次個人は非常に陽気で笑顔が特徴的な男だ。その男から笑顔が無くなるほどの冷たさを浴びせられ続け、とても苦しかっただろう。

その証拠に慶次は歩いている中でも、何度もお礼を言ってくる。夢吉も頭を下げてくる。

「ホントになおちゃんには感謝してるよ。見捨てないでくれてありがとう」

「これで四度目だぞ、ミスターポニーテール。ドリームボーイもつられて頭を下げなくていい。一度言われれば、それで十分伝わる」
「悪い悪い。でもどうして俺を拾ってくれたんだい？ 独眼竜の知

り合いだから？」

「いや、単純に私が見捨てたくなかったからだ。さっきも言ったように、私はおせっかいなんですね」

はにかんだ笑顔を向け、なおは言う。慶次もつられて笑った。二人ともつい立ち止まってしまったものの、既に日は暮れて通行人も少ない夜だ。よほどの事が無い限り、見逃されるだけで終わる筈だ。とりあえず帰ったら雪子に連絡しよう、となおが考えてる中、慶次がふと交通道路に顔を向けて固まった。

「……マジかよ」

「どうした、ミスターポニーテール。車に関するツツコミならばスルーしたいのだが」

「けいとらのにだい、だっけ？ その上に知ってる奴がいた……」
「なにいいい!？」

慶次の報告になおは驚きながら、彼の目線の先を見る。そこには丁度赤信号で止まった白い軽トラがあり、彼の言うとおり荷台には人が突っ立って乗っていた。前後左右の車のライトがなかったら見逃してただろう、漆黒に包まれた“忍者”の男が、だ。

忍者を目撃した二人は最初顔を見合わせると、こくりと互いに頷き、交通道路側に走りながら声を上げた。

「ちょ、ちょ、ちょっと忍びの兄さーん!!」

「早くこっちおりてこーい! 軽トラの荷台は人を乗せる場所じゃねえええ!!」

この後、青信号になって軽トラが動き出してしまったものの、その勢いを諸共せずにこっちへ文字通り飛んできた忍者になおは更に驚愕するのであった。

第一章・2「何事も一度で終わらない」(後書き)

一日目はまだ終わらず、武将が追加！最後の一人は多分皆様分かっていらつしやるかと。

後、オリキヤラ真田雪子はこれからも登場します。便利なので。

第一章・3「二度ある事は三度あるで終わってほしい」(前書き)

当初の予定では2と英雄外伝で行くつもりでしたが、急きよもぶちこむ事に決定しました。

なお「唐突だな。続くのか？」

.....。

なお「そこは即答しろ」

第一章・3「二度ある事は三度あるで終わってほしい」

前田慶次と軽トラの上の忍びを保護したなおは、すぐさま家に帰って二人を居間に突っ込むと自宅の電話で雪子に連絡を入れていた。ちなみに両親はそれぞれ二日程度の出張、弟は友達の家泊まりである為、家には三人しかない。

これまでの経緯を伝えたなおに対し、雪子は簡単にまとめて確かめる。

『……それで明日からはその二人も私にどうにかしてくれと？』

「私の家には金も部屋も無い。私個人にあるのはお節介な心と無駄にある体力とすらりとした美貌ぐらいだ。だから住処に関しては、お前がどうにかしてくれ。出来るか」

『言われなくてもそうしますわ。この事態を異常という理由で見捨て、見ないフリをするのは愚か者の証拠ですもの。でも私の財力などをもっても誤魔化せる範囲は限られています。だから、ある程度は……』

「了解した、プリンス・雪子。出来る限り、やってみる」

『ありがとう、島川さん。ああ、それから伊達さんは色々面白い反応をしてくださっていて、元気ですわよ。変わりましたか？』

「いや、二人を待たせているから明日で良い」

『そうですか。ではまた明日』

「ああ、また明日」

電話を切り、なおは居間に戻る。居間ではL字型ソファに座った慶次と忍びがあり、慶次が一方的に尋ねていた。なおは慶次の隣に座る。

「ミスターポニーテール、ブラックウィンドの事情は分かったか？」

「うーん、北条のじいちゃんどこにいたって事ぐらいしか……」

右の人差し指で頬をぼりぼりかきながら答える慶次。肩に座っている夢吉も同じように苦笑し、頬をぼりぼりかいている。どうやらあまり分からなかったようだ。

なおは忍びに顔を向ける。漆黒の衣を身に纏い、逆三角形と呼ばれる整った体格をしており、目元さえ覆う兜をつけた赤髪の男。風魔小太郎は何も言わず、腕を組んで座ったままだ。

帰る道中で慶次から「雇い主でさえ声を聞いた事が無い凄腕の傭兵」とは聞いていたものの、こんな状況下でも動揺する素振りを一切見せずに無口を貫くとはある意味さずがである。いや、軽トラの荷台に仁王立ちしていた彼に動揺の二文字は無いのかもしれない。

なおは内心あっぱれと思いながらも、風魔に話しかける。

「さてとミスターウインディ。これから色々と尋ねるから、首を動かして答えてくれ。はいなら頷き、いいなら横に振り、分かんないなら傾げて、答えたくないなら無動作で頼む。私に心を読む力は存在しないからな」

なおの言い分に風魔は頷いた。なおはそのまま質問していく。

「お前が軽トラの荷台で突っ立っていたのは、単純に飛ばされた場所がそこだったからか？」

「（こくり）」

「……場所を把握してから動くつもりだったのか？」

「（こくり）」

「不可抗力だったわけか。……飛ばされる直前、雷や爆発もしくはそれに匹敵する衝撃はあったか？」

「（ふるふる）」

「至って平和、だったのか？」

「……………」

「首をかしげたって事は微妙って事だな。襲撃があつたのか」

「（……こくり）」

「何で間が空いた？」

なおが更に突っ込んでいくと風魔は首を動かさず、代わりに己の姿を一瞬風で包み、変化させた。大事な部分はちゃんと隠しているものの全裸に近い男性、その次に緑のバンダナをつけた凛々しくも家庭的な印象を与える女性、にと二回にだ。

その二つの姿を見た慶次は「げっ」と引きつった声を出した。

「利とまつねえちゃん、北条に尋ねに行つてたのかよ……」

「この親不孝者兼間接的トラウブルメイカーめ」

ぺちつとなおは慶次の頭を軽く叩いておいた。慶次がトラブルメイカーの意味に分からず、不思議そうにしていたもののおは無視する事にした。

「それで利とまつねえちゃんの相手をしている最中、飛ばされたのか？」

「（こくり）」

「お前を含めた三人だけか」

「（ふるふる）」

「雇い主も一緒だったのか」

「（こくり）」

「よし、では四人が飛ばされたということでもいいか」

「（こくり）」

「飛ばされた時の詳細について、説明できるか」

「（こくり）」

まつねえちゃんの姿のまま答えていた風魔は頷くと、再び利の姿に変化し、口から火を吐いた（熱さは感じなかったので、幻惑の一種であろう）。いきなりの事になおが目を丸くしたものの、風魔はまたも姿を変える。今度はヒゲこそ立派に長いものの、体格的には細め（現代に比べれば立派だが）の老人であり、何故かその周囲に三角布を額につけた顔面の人魂が浮かんでいた。

唐突の変化になおはついていけない隣、慶次はどうか察したのか風魔に確かめる。

「……What?」

「えーと、利とじっちゃんの婆娑羅技がぶつかり合った衝撃ってこと?」

「（こくり）」

「あー、なるほど。確かにそれならさっきなおちゃんが上げた衝撃には入らないよな」

「……そうだった。ミスター伊達男が雷ぶっ飛ばせるんだから、人が火を噴いたり、人魂浮かしたりするのもおかしくないんだった」

なるほどなるほどと一人納得する慶次を眺め、なおは頭を抱えた。連続して凄まじい事が起きていた衝撃からか、政宗が雷をぶっ飛ばして仁王車をぶっ壊した事をすっかり忘れていた。この二人の会話（?）を聞く限り、どうも政宗だけでは無さそうだ。寧ろ色んな人が使っているとしたか思えない。

らしくない頭痛を感じながらも、なおは二人に言う。

「……すまないが、そのBASARAを使える連中の名前を思い出す限り、挙げてつてくれないか」

なおは自分で言っただけで、凄い嫌な予感をひしひしと感じ取ってしまった。それも腹の底から。

結論から言おう。なおの嫌な予感は大当たりであった。

慶次が上げた名前の数は非常に多く、既になおが会っている三人を含めると三十人前後という多さであった。有名どころはもちろん、政宗・慶次から聞いた名前もあり、なおにとっては忘れてしまっている者の名前もあった。一部ツツコミを入れたい名前もあった。ちなみに風魔が慶次の付け足し（といっても忘れている武将がいると首を横に振って示すだけだが）もしたので、出し忘れはこれではない筈だ。

念の為、どういう人物なのか也大雑把に聞いておいたのだがこれがまた凄い。どいつもこいつも個性的で、なおは自分が会った三人はまだまだマシな方だというのを思い知った。

「……爆発馬鹿に殺戮馬鹿に正義馬鹿に愛という名の暴力ヘンテコ宗教に筋肉馬鹿。魔王に霸王に戦国最強、とかつて……ツツコミがおいつかねーってレベルじゃねーぞ！」

「なおちゃん、落ち着いてって！ 可愛い顔が台無しだよ？」

「美少女はどんな顔でも美少女だから大丈夫だ！」

荒れるなおをなだめようとした慶次だったが、変な反論をされて思わず「あ、そう」と目が点になって頷くしかできなかった。

一方のなおはすぐさま落ち着きを取り戻す。

「とにかく大体は把握した。……これは明日がある意味楽しみだな」「楽しみって、どういうことだい？」

「それはこれから説明するが、とりあえず飯にしよう。喜べ、この世界特有の飯を食わせてやる」

そう言って席を立ち、キッチンに向かったなお。

慶次は待つてましたと言わんばかりに明るい笑みを浮かべ、彼の

肩で良い子に座っていた小猿の夢吉も立ち上がって嬉しそうな声を上げる。

「おっ、そりゃ楽しみだね！俺も夢吉もハラペコだったから、なおちゃんの手料理を食べたくて仕方ないよ」

「ききーっ！」

「あんたもそうだろ？」

「……」

「いや、ここは頷くところだろ！」

隣に座っている忍びに声をかけるものの、当の風魔は全く動かない。肯定なのか否定なのか分からず、慶次は変わらない明るさでツコミを入れた。でも風魔は動かないままだった。

その時、キツチンからなおが戻ってきた。片手に異国語が書かれている赤色の紙筒を三つ抱え、もう一方の手で見慣れない白いカラクリを持って。

思った以上に早い到着と見慣れない代物の登場に慶次と夢吉はキョトンとする。

「何それ？」

「きー？」

「カップラーメン。材料中ぶちこんで、お湯入れて、三分待てば出来上がり。で、こっちはポット」

なおは簡潔に答え、紙筒ことカップラーメンと白いカラクリことポットを机の上に置く。

どう見ても飯に見えないそれに慶次は呆気にとられた様子で見つめながら、なおに間抜けな声色で尋ねる。

「……えーと、これが飯？」

「うん、これが飯。安心しろ、美味いから」

「何でこれにしたの？」

「世界の決定的違いを教える為に決まっているだろ！」

「絶対それ方向性間違ってるだろ！？」

胸を張って言い切ったなおに、慶次はすかさず裏手ツツコミを入れた。夢吉も一緒にやった。漫才みたいな状況でも、風魔はノーリアクションであった。

勿論この後、カップラーメンを三人それぞれ美味しくいただいたのは言うまでもない。夢吉の分は慶次が別けたものの、大食いの彼はカップラーメンを二つ食べたと付け足しておく。

カップラーメンを食べ終え、適当に片づけを終わらせてから風呂を沸かし始めてから居間に戻ったなおは、慶次にこの世界特有のものについて簡単に説明する。

「にゆうす？」

「そつ。この世界はとんでもない情報社会になっているからな。何処か遠いところで何かでかい事件が起きれば、誰にでも知れるようになるっている。テレビだと特定の時間、パソコンだとこちらから調べれば、あつという間だ」

「へー、便利だなー。あ、って事はみんなの居場所も分かるかもしれないってことか？」

「聞く限りとんでもない連中だからな。何かアホやらかしてくれたのなら、報道されてる筈だ。これで報道されたのが先ほど話した仁王車だけならば、全員潜伏状態かお前等しか迷い込まなかったしかなるのだが……」

そう言いながらなおはテレビのリモコンを使って、テレビの電源を入れる。時間は七時五十七分という中途半端なものであり、ニュースをするには絶好の時間帯だ。テレビの画面にはなおの予想通りニュースとなっており、落ち着いた態度の女性アナウンサーが今まさに最新情報を読み上げようとしているところだった。

『臨時ニュースです。今日の午後七時四十分頃、××地区付近のコンビニの前で集会していた暴走族が襲撃されるという事件が起きました。暴走族とバイクには無数の矢が刺さっており、被害者は急いで病院に搬送されました。幸いな事に全員命に別状は無く、近い内に退院できるとの見通しです。現在警察は襲撃犯に対しての捜査を開始しており……』

かつちーん、という物音が聞こえそうな勢いでなおと慶次が固まったのを風魔は見逃さなかった。その間、テレビの中のアナウンサーは普通にニュースを読み上げている。その際、場面が転換して現場の状況が映し出されている。見るからに趣味の悪いバイクに複数の矢が刺さって台無しになっている姿は悲惨というべきか壮観というべきか、しかしそれはまだマシな方でバイクの中にはどういう原理か知らないが氷付けになっているものまである。被害者の姿まではさすがにテレビに映らなかったものの、バイクと同様の状態になっているのだと察する事は出来た。

初っ端から起きた大事件に呆然としていたものの、なおは我に返るとフラフラと立ち上がる。

「ゆ、雪子に電話入れてくる……。多分もう動いてると思うけど……」

「あ、うん……」

同じく呆然とする慶次が頷いて返すものの、なおはまだショック

が強いのかぶつぶつと呟きながら部屋を出るだけであつた。

「弓での襲撃って事は、森蘭丸か……。悪戯好きのワルガキとは聞いていたものの、こうも行動が速いとは。この事から考えて保護者に値する連中はいないって事なのか？」

なお個人は先ほど慶次から聞き出した者達から唯一の弓使いである蘭丸をピックアップしているようで、慶次と風魔はそれを聞き逃さなかつた。

彼女が部屋を出たのを確認した後、慶次は再度テレビに目を向ける。テレビでは既に次のニュースに変わっており、見知らぬ格好をした年配の者による政治のものとなっている。

慶次は先ほどのニュースを思い返し、とある部分に対する違和感について語り出す。

「……蘭丸は悪戯好きで弓使いだからこうなる事に関しては別に違和感が無い。でもな、これは蘭丸じゃない」

「……」

「蘭丸の属性は『雷』だから『からくりを凍らせる』なんて芸当、出来るはずがないんだよ。でも俺の知ってる氷属性はこんな意味の無い事をする筈が無いんだ。だから俺達が全く知らない奴の仕業になる筈だ。でも婆娑羅者はあの時全員上げたし、誰も見落としていない。ならこれは一体誰の仕業なんだ？」

当然ながら、風魔からの答えは無い。慶次はそれを彼も知らないのだととらえた。

しかしこの答えはある意味当然ともいえた。何故ならば、二人共にこの時点では“まだ”氷属性の弓使いに会った事は無いのだから。

第一章・3「二度ある事は三度あるで終わってほしい」(後書き)

というわけでまたもフラグが経ちました。

なお「さっきからこればかりだな。というか平穏な時は無いのか？」

がんばれ、主人公！

なお「……無いのだな？　ったく……」

さて、今回の話ではまたも新キャラフラグ。多分皆様分かっていていますが、引き続き見てくださると嬉しい限りでございます。

なお「次回予告すると次の第一章・4からは明日に切り替わる。さてさて、四人目の迷子を捜すのはどれだけ大変な事なのやら」

第一章・4「時を穿ったら、ここに辿りつきました」

土曜の朝、交通道路の上を車が走る。こうして文章に書くだけならば何時もの光景であり、日常そのものだが実際は違う。正確に書くとするならば、交通ルールを無視してトラックが激走していた。

どうやったらそんな運転出来るんだとツツコミを入れたくなるぐらいの速さと追い抜きテクニク、信号が変わる直前でのスピードアップ、途中で渋滞があればわざわざわき道を使い、高速道路の運転レベルのスピードで切り抜けるなどと異常としか言いようが無い激走っぷりである。それを引き起こしているトラックの運転手は老人と呼べる皺と白髪を持つ男性であり、実際に乗っているところを見ない限りは冗談か何かだと疑いそうなギャップを持っている。

そして何よりこのトラックが異常な事はその派手に揺れる荷台には荷物は何も載せられておらず、向かい合う形の席と壁の部分に設置された電話やら機械が代わりにあるという事。そしてその荷台には五人の人物が乗っていた。その内の一人 島川なおは、

「おげええええええええ……」

ビニール袋持って、その中にゲロを吐いておりましたとさ。

後乗っているのは、なおの背中を撫でるのは隣に座る前田慶次、呆れた様子で見ているのは向かいに座る伊達政宗と真田雪子、そして相変わらずのノーマリアクションで運転側の壁を背もたれにして、腕組して立っている風魔小太郎。

鼻につく異臭とみっともない姿に、雪子は顔を反らしながらわざとらしい盛大なため息について嫌味を吐く。

「全くレディとしての自覚がございませんの？ 殿方三人の目の前で吐くだなんて、何てお下品な……」

「ダアホオ！！　こんな乱暴運転でゲロ出さん方がおかしいだろうが！　……うぷっ」

なおは勢い良く言い返すものの、車酔いが再発したのか顔色を青くして手で口を抑える。その様子が慶次が慌てて彼女の背を撫で、大丈夫か、水飲むかと優しく声をかける。彼の肩の上では夢吉が新しいビニール袋を持って、スタンバイしている。

昨日以来である彼女の姿があまりにもひどいものに対し、政宗はつい言葉をこぼす。

「まったく柔な女だぜ。こんなSpeedじゃPartyになんねえのに、ノックダウンが早すぎるだろ」

「島川さん、酔い止め飲まないとトコトン酔うお方なんですの。飲んでおけば大丈夫なんですけど、ここまで無様な姿を垣間見る事があるとは思っておりませんでしたわ」

「雪子ちゃん、出来ればそれ以上言わないでくれると嬉しいんだけど……。なおちゃん、びくびく震えてるし」

「あら、それは失礼しましたわ」

平然とした顔つきの雪子の言い方に苛立ちを感じているなおの背をなでて宥めながら、慶次が控えめな言い方で彼女にストップをかける。政宗は珍しい光景だと思っただ、ここにいる面々の性格から考えてならざるを得ないのだと内心納得した。

さて、何故この五人が異常な激走トラックに乗っているのかというと、話は少し前に遡る。

暴走族襲撃氷付け事件が流れた後、なおはすぐさま雪子に連絡したのだが、彼女は既に行動を起こしていた。何でも事件の後始末を全て引き受けた後、被害者の暴走族を半ば脅す形で詳細を調べ上げた後、すぐに己の動かせる部隊を秘密裏に動かしているらしい。あ

まりの速さに驚愕したなおであつたが、雪子からすればまだまだ遅い方とのこと。どの時点から早いか聞きたい。

しかし向こう側の方が一枚上手らしく、追い詰めてもすぐ逃げられた。相手はたった一人だというのに情けない話と思われがちだが、その人物は“ジャンプを使って家の屋根の上に逃げる”という人間離れた行動力で部隊を翻弄し、一晚逃げ切るぐらいの体力を持っているのだから、どうせいというのだ。幸いにも発信機を取り付けることには成功しているんだけど、追いつけなければ意味無い。

これでは埒があかないと踏んだ雪子は翌朝、このトラックと政宗を引き連れてなおの家にやってきた。追跡劇を早く終わらせる為、武将達に協力してもらう為である。あまりに早すぎる行動になおは最初驚いていたが、事情を知ってからは何時もの態度を取り戻して二つ返事で了承した。慶次と風魔も断る理由が無かつたし、前者はお人好し、後者は単純になおに頼まれたから、参加する事を承知した。何故風魔がなおの言う事を聞くのか理由は不明だが、今はそれを利用させてもらうとしよう。

こういった事情により、今激走しているわけだ。ただ朝早くからの誘いだつた為、なおは大慌てで一番汚れが目立たない制服に着替えて乗る羽目になったが。制服が一番動きやすい事もあるが、服を一々選んでいたら雪子の怒りを買ってしまうからだ。彼女の怒りには慣れているものの、ネチネチ言われるのは嫌なのである。ちなみに雪子も動きやすいという理由から、制服を身に付けている。

そして今現在、雪子の執事であるセバスチャンが運転するトラックで発信機を頼りに追いかけているのである。ちなみにトラックに偽装しているのは「違和感が無い」からである。別の意味で違和感があるのだが、生憎とそれに突っ込める人物は車酔いでダウンしていた。

夢吉から新しく貰ったビニール袋にゲロを吐くなおから目を離し、政宗は一枚の紙に目を送る。

「しかし……本当にこいつがターゲットなのか？」

その髪には女の似顔絵が描かれていた。純白可憐という言葉が似合いそうなボブカットの可愛らしい十五、六程度の女のもので、服装は巫女のそれであつた。ただし袴は短く、上には青の鎧をつけている事からして、ただの巫女ではない事は分かる。その手に弓を持つていることから照らし合わせば、彼女が今回のターゲットである事は一目瞭然だ。最も似顔絵のすぐ横に「ターゲット」と書かれているから、こんな説明はいらないのだが。

政宗の呟きを聞き取った雪子が頷く。

「ええ、目撃証言を照らし合わせて書かせましたもの。間違いありませんわ」

「だがミスターポニーテールもブラックウィンドもそいつの事を知らと言った。ミスター伊達男、お前も知らんのだろ？」

ここで漸く酔いから解放されたなおが口元を手で拭き取りながら確かめる。政宗は頷き、軽く答える。

「ああ。俺の知ってるばさら使いの女は大体が旦那持ち、独身は農民のガキだけ。巫はいなかった」

「ですがこの巫女は現れましたわ。これを知らないという言葉だけで済ませないでほしいですわね。……衣食住提供した私に対し、納得のいく説明をしてほしいのですが」

この五人の中で、経済的意味合いで割を食っている雪子が政宗に反論するものの、細かい事だと言わんばかりに政宗は笑い飛ばした。

「Ha! 何を心配してやがる、捕まえて洗いざらいぶちまけさせ

ればいい話だ。俺は相手が女でも容赦しねえ主義なんぞな」

「同感だ、ミスター伊達男。ごちゃごちゃ考えて酔いを酷くするぐらいならば、捕まえてスッキリした方が手っ取り早い」

そこに続くようになおが若干生き生きした様子で同意した。発想が女子高生とは思えない男らしい大雑把なものであり、政宗と同じギラギラした野生の笑みを浮かべていた。

「気が合ってますね、あなた方」

「なおちゃん、もしかして元親に似てる？」

猛獣と呼ぶに相応しい二人の笑みを見た雪子と慶次は互いに思った事を述べるのであった。この間、風魔は微動もなかった。

その時、突如としてトラックが大きく揺れて風魔を除く四人はバランスを崩しかけた。一番酔っていたなおはずっこけたあまり、一つ目のビニール袋に顔を激突させてしまった。幸いな事にビニール袋の口は縛ってあった為、惨劇にはならなかった。

雪子はすぐさま壁につけていた受話器を手に取り、運転しているセバスチャンに向かって怒鳴りつける。

「何故車のスピードを緩めましたの、セバスチャン！」

『お嬢様、大変でございます。ターゲットはこの車の後ろを並走しているようなのです。先ほど突如として現れました為、例の跳躍能力で移動してきたのかと……』

「はあ！？ 後ろって……ここは道路なのに!？」

だが帰ってきた返事とはんでもないもので、雪子は益々声を荒げる事になる。

その言葉を聞いた慶次はすぐさま席を立ち、トラックの扉につけられた小さな窓から後ろを覗き見る。その向こうに見えたのは、二

台後ろの車の上、しっかりと両足で立っている巫女の姿であった。

「いた！ 車の上に立ってる！！」

「退け、前田慶次！」

政宗に言われ、慶次が扉から距離をとる。次の瞬間、政宗は鍵をかけていた筈の扉を蹴破った。凄まじい風圧が荷台の中に入り込み、各自の戦装束やスカートがばさばさと乱れた。

凄まじい風の中、政宗は床を蹴つてすぐ後ろの車の屋根に飛び乗った。ぼごと凹んだ音がしたが無視し、体勢を整えて腕組みをすると己同様車の上に乗っている巫女に声をかける。

「よお、巫。随分と派手に暴れたみたいじゃねえか。Partyにしちゃ、随分とお粗末じゃねえか」

「まあ！ 私はどっかの海賊と同じみたいな言い方しないでください、伊達さん！」

「Ah？」

しかし返って来たのは、可愛らしいものであった。両手に腰を当て、軽く言い返す姿は知り合いの農民が持つカリスマ性（ただしやや間違った方向の、がつく）を連想させ、相對する相手は和みそうになる。もっとも伊達政宗という男は、そういう態度で和むなんて事を一切感じないタイプであるが。

それよりも引つかかったのは彼女の言い方だ。初対面である筈なのに馴れ馴れしい、いや、少なくとも面識がある言い方をしている。政宗の記憶には彼女の事なんて無いし、彼女自身はパツと見では嘘をつけるタイプには見えない。寧ろ騙されやすいタイプに見える。

だからこそ彼女の態度の意味が分からなかった。

それは彼女にも伝わったのか、巫女は静かに口を開いて悟った風に呟く。

「……やっぱり、伊達さんは私と初めて会う事になるんですね」

「Ah? 何を分かった風な事を言いやがる。初対面だろうが」

「はい、今のあなたにとっては初対面です。でも私にとっては初対面じゃありません」

「意味が分からねえ」

「うーん、ねえさまみたいにバシッと説明できたらいいんですけど……」

「だからそれを証明してみせな。俺の事を知ってるんだったら、満足させられるだろ？」

悩む巫女に対し、政宗は刀を一本抜いて構える。 同じ戦国に

生きる武将ならば、男女関係無い。ごちゃごちゃ言うのは誰にでも出来る事だから、納得させる為には力と力をぶつけ合わせるのが丁度良い。どんな立場にしようとも、戦国の武人であるならば戦場で己を貫かせる覚悟を持っている筈だから。

政宗の言葉を聞いた巫女は最初こそ驚いた様子を見せたが、すぐに覚悟を決めた顔をして力強く頷いた。

「分かりました。私があなたと同じ東軍の武将だという事、ドーンと証明してみせます！」

「OK。ガキを甚振るのは趣味じゃねえが、こういうPartyも悪くねえ」

東軍という気になる単語が出てきたものの政宗はあえてスルーし、臨戦態勢に入る。同様に巫女も弓矢を構え、政宗に向ける。

異世界の車の上、注目と驚きを集めながらも二人は目の前の敵に向かって、名乗り上げる。

「私は鶴姫、白い翼で羽ばたく鳥です！」
「奥州筆頭、伊達政宗……推して参る」

第一章・4「時を穿ったら、ここに辿りつきました」(後書き)

はい、というわけで四人目の迷子は鶴姫ちゃんでした。既にヒントは諸々出ていたので、皆様気づいていたでしょうが。

なお「質問OKか？ 何で鶴姫と政宗、初対面って事になっている。2と3で別けているのか？」

ぶつちやけ、その通り。だから政宗も慶次も小太郎も鶴姫ちゃんの事、全く知りません。というかネタバレしますと、2勢からすれば3勢とはほぼ初対面そのものです。

なお「こ、ここで言っているのかソレ？」

良いの良いの！ 寧ろその上でどう接触させるかが肝なんだからさ。ふはははは、想像するだけで興奮してくるよ！！

なお「……興奮しすぎだ。おつと読者の皆様、こういう理由なので2勢から見て3勢との繋がりは限りなく薄いものと見てくれ。特に3軸で起きたフラグなどは無いに近い。例えば風魔が無自覚で立てた鶴姫のフラグは、鶴姫しか知らない状態となっている」

色んなものが入り乱れる中、第一章・5で初の戦闘シーン！ お楽しみー！！

なお「テンション上がりすぎじゃないか？」

だって鶴姫ちゃんマイキャラなんだもん。いや、鼻負する気は一応無いんだけど。

なお「……ああ、そうか」

第一章・5「奥州筆頭VS純白可憐 交通車上戦」

土曜日の朝だというのに、本来ならば通勤時間もしくは家族でのドライブに使われる車が走る交通道路とその付近は、非常に騒がしい事になっていた。正確に言う交通道路を走る車の上のものに皆が目を奪われていた。何せ、車を足場にして戦国武将と巫女さんがガチバトルを開始しているのだから。

「MAGNUM STEP!!」

政宗は二つの刀を回転させ、車の屋根を蹴ってジャンプしながら突進する。

その攻撃に鶴姫は跳躍して回避すると上から矢を連続で三回発射しながら、右隣の車の屋根に着地する。そこで光の矢を取り出し、己の周囲に光の矢 『無量の矢』を展開させようとする。

だが一回転するという大きな動作が引き起こす隙を、政宗が見逃す筈も無く右手に三つの刀を持って彼女の真上まで飛ぶと竜の爪を振り下ろした。

「DEATH FANG!!」

真上からの大きな一撃に鶴姫は対処しきれず、直撃してしまい吹っ飛んでしまう。勢いがやまぬまま、鶴姫は背中から斜め後ろの車のボンネットに落ちてしまう。その衝撃によって車が急ブレーキをかけて止まってしまい、鶴姫は落ちそうになるが咄嗟にワイパーをつかんでギリギリ持ちこたえ、膝を立てる。直後、その急ブレーキに対応するかのように後続の車が次々とブレーキをかけていく。またそれは道路全体の車も同じ事であり、政宗の乗っている車も止まった。

そして我先にと言わんばかりに、各自の車から人々が一般道路に向かつて逃げ出していく。車と車の間を巡り、中には鶴姫同様ボンネットを足場にして逃げるなどと軽いパニック状態である。……いや、これで平然とされてる方が恐ろしいのだが。

「馬の方がHardだろ」

その様を眺めながら、政宗はぼそりと呟く。ちらりと鶴姫の方を見ると彼女は車の持ち主らしいおばさんにぺこぺここと謝りながらも早く退却するように促している。どうやら彼女は一般人が退却してから続きをやるらしく、政宗もまた同じ考えなのでそれに合わせて待つ事にした。

そして誰もが退散したのを二人が確認すると、政宗と鶴姫は同時に戦闘を再開する。

鶴姫は立ち上がり、政宗一直線に先端に光の宿った矢『一の狙い矢』を放つ。

咄嗟に一本の刀で防御し、矢を防ぐと政宗は車の屋根と屋根をジャンプして渡り、鶴姫のいるボンネットにまで飛び移るとその一本の刀で切りかかる。

だが相手は咄嗟に己の弓を前に出し、ぶつけ合わせる。弾き返されそうになったものの、政宗は刀を更に振るい、鶴姫の弓とぶつけ合わせる『剣劇』を開始した。

辺りに衝撃を走らせるほどのそれが響きあつていく中、鶴姫は余裕の無い顔で言葉を洩らす。

「やっぱり手加減がありません……!!」

「Ha! 独眼竜は伊達じゃねえ。悪いな、よっぽどの奴じゃない限り手加減する気は無いんでね、you see?」

「はい、分かっています! だから私も妥協無くおもてなしします!」

「そうか。なら……せいぜい楽しませてみせな!!」

ハッキリと言い切った鶴姫に対し、政宗は力を込めた刀で弾き飛ばして吹き飛ばした。その勢いは凄まじく、鶴姫の体は歩道にある公衆電話に背中からぶつかってしまおうと見ているだけしか出来ない通行人は判断し、思わず目を反らしてしまう。

だがガラスの割れる音はせず、代わりに疾風の音がかすかに聞こえただけだった。

恐る恐る何事かと公衆電話の方を見てみて、通行人らは固まった。政宗もまた公衆電話の“上”に目を向け、相手の出方を待つ羽目になった。

何故ならば黒い羽が若干舞い落ちる中、漆黒の忍び 風魔小太郎が鶴姫を横抱き（お姫様抱っこもいう）して、公衆電話の上に立っていたのだから。

「宵闇の羽の方……!」

鶴姫はというと、いきなり己を助け出した風魔に警戒するどころか、抱かれたままの体勢でやけにキラキラした瞳でうつとりとした声で見上げていた。完全に恋する乙女そのものであり、気のせいだろうか彼女と風魔の周囲に桃色の空間が生まれていた。ただし風魔は鶴姫を見ておらず、政宗の方に顔を固定したままだが。

唐突な乱入者の出現に、政宗が奇妙がっていると不意に背後に気配を感じて振り返る。そこには前田慶次が立っており、政宗は彼に説明を求めた。

「おい、これはどういうことだ?」

「道路のど真ん中で喧嘩するなって言われたから、止めたんだと思

うよ。雪子ちゃんカンカンに怒ってたなあ、こんなド派手にやられたら誤魔化しきれないって」

「誤魔化す？」

「この世界の人はさ、目立つ変な人にはすっごい過敏に反応するし、にゆうすつて奴ですぐに色んな情報を手に入れられるんだ。だから、そういうのは凄く嫌ってるんだよ」

「……そういう事が」

徐々に表情が曇っていく慶次の説明を聞き、政宗は辺りを見渡ししながら理解する。歩道に逃げ込んだ通行人が立ちすくみ、怯えと恐怖、そして若干の好奇心の目で己等を見つめており、それが如何に己等が奇妙な存在であるかを示していた。

昨夜、雪子から簡単にこの世界の事を聞いており、平和で食物が豊かだというのは把握している。だがその分、戦う牙を失い、過去のエグい話を知ることが出来るからこそ、余計に争う事と異変を嫌う。自分と他人の絆と縁が薄くなってしまい、冷たくなってしまったと。

彼女の家（つてか豪邸）では味わう事があまり無かったものの、今こうして見つめられていれば嫌でも分かってしまう。そして味合わされる、ここが異世界である事を。

どうやら右目がない事と未知の体験が多すぎたせいかな、自分でも随分と軽率な行動に出てしまっていたようだ。政宗はそう判断し、舌打ちする。

「Shit! らしくねえな」

「分かったんなら良いよ！ それに雪子ちゃん、どうにかするって言ってたし」

「What?」

政宗が反省したと見た慶次は素早く笑顔で受け流し、大丈夫だと

フォローを入れる。その話を聞き、政宗は不思議に思う。さつき誤魔化しきれないと怒っていた筈なのに、どうにかするとはどういう意味なのだろうか。学校の時のようなごり押しが通じるような状況とは、思えないのだが。

間違はなく何かをやらかす。それも良いとは思えない形の何かを。独眼竜としての直感と戦国武将としての判断力がそう告げるものの、時既に遅し。

耳障りなサイレンの音と共に道路の脇を潜り抜けてきた白色のバイク数台、歩道や反対道路を使ってやってきた複数の白と黒の車パトカーが一同の周りを囲み出し、その中から出てきた警察官等が一斉に拳銃を構えた。

「げっ！」

「……やりやがったな、あの女」

包囲網にされてしまった中、警官に良い思い出がない慶次が嫌そうな顔をする隣、政宗は声のトーンを低くしながらもコレをやらかした張本人がいる方向を睨みつける。

そこには扉の開いたトラックから身を乗り出し、腰に手を当てた真田雪子の姿があった。彼女は息を軽く吸い込み、そのまま勢い良く言い切った。

「自業自得……という言葉、味わいなさいませー！」

直後、警官等が四人を捕まえようと突撃を開始した。それは平和ボケしたこの世界の住民にしては非常に迅速で訓練されているものでございました。

地上にいる二人が捕まえられていく最中、公衆電話の上で風魔に降ろされた鶴姫は何か理解したようにこくこく頷きながら呟く。

「あ、今朝見えたのはこれだったんですか……」

「……………」

「宵闇の羽の方、大丈夫ですよ。白雪のお姫様はちゃんと皆様を解放してくれますので」

首を軽く傾げてにつこり微笑み、くるりと回って風魔を見上げながら鶴姫は危険が無いと言い切った。その顔に嘘偽りは無く、言葉もまた断言されたものだった。

風魔は「害は無い」と判断し、出る前になおと雪子に言われた指示通りに動く為、鶴姫を再び抱えて公衆電話から降りると彼女ごと警察に連行された。

あつという間の逮捕劇を眺めているしかできなかったなおは、恐る恐る雪子に話しかける。

「……おい、逮捕しちゃっていいのか？」

「真田財閥の凄まじさの前には、警察も法も無力ですわよ」

得意げに答える雪子になおは呆れて物も言えなかった。

この後、雪子の豪邸に帰ると緊急用として警察の中に兼任という形で潜り込んでいた真田財閥の特殊部隊の方々により、丁度送られてきた政宗等と再会する羽目になるとは、なおは思ってもいなかった。

第一章・5「奥州筆頭VS純白可憐 交通車上戦」（後書き）

いやー、雪子お嬢様はやっぱり便利だわさ

なお「……こっちは心底心臓に悪かったんだが……」

言われても困りますってば。雪子お嬢様に言つてよ。

なお「圧倒されるのが目に見えてる。にしても雪子の財力は一体どうなっているんだあ？」

うる星やつらでいう面倒家、ケロロ軍曹でいう西澤家と同じぐらいと見てくれれば大丈夫です。

なお「……そうか」

三人目出したら近いうち、オリキヤラ紹介もやるからなおちゃん含めてみんなの紹介するからそん時にちゃんと書くよ。

なお「了解。って、三人目？」

それでは次回、お楽しみに！

なお「おい、スルーするな!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689m/>

現代B A S A R A

2010年10月11日08時16分発行